

〔特別寄稿〕

「文化」と「家族」 —文化人類学の視点—

川添 裕子

要 旨

本稿は、「文化」と「家族」に関する文化人類学的な視点と知見を提示するものである。その目的は、家族看護学に「文化」という視点を加えることにある。

「文化」の視点からみた場合、家族を扱う研究は大きく二つに分けることができる。一つは、「家族」の存在を自明とし、特定の地域には独自の家族のあり方があると措定するものである。必然的に、研究の焦点は構造や機能に当てられる。もう一方は、まず「家族」という概念自体の文化的、社会的構築性を問題にする。現在文化人類学はこの立場に立っている。なぜならば、「家族」の解釈が西欧中心主義に基づいていること、また今日一般的に意味される「家族」が近代社会の産物であることが明らかになったからである。つまり「家族」という概念は、それ自体が文化的、社会的構築物なのである。「文化」の視点を持つということは、この文化的、社会的構築性を理解することである。

問題は、多くの人が「家族」の存在を自然なものとしてとらえており、その文化的、社会的構築性に気づくことが難しいということにある。したがって看護学は、「家族」概念、およびそれに基づく看護理論や方法を批判的なまなざしをもって検討するところから出発する必要がある。既存の認識や方法を転換することは容易ではない。さらに看護学には、「家族」の存在を自明とする社会の中で看護実践を行わなければならないという二重の困難さがある。しかし筆者はこの困難さゆえに、看護分野には人々の現実と理論を架橋する可能性があると考えられる。

キーワード：家族、文化的能力、ネットワークとしての家族、文化人類学

1. はじめに

近年米国では、医療従事者に「文化的能力 (cultural competence)¹⁾」が求められるようになってきている。字義通りに訳せば、文化的なことを適切に扱える能力ということになる。残念ながら日本では、均質性を強調する見方が浸透しているために、医療分野だけでなく社会全般に「文化」に対する解釈および配慮が十分ではない²⁾。

本稿は、「文化」と「家族」に関する文化人類学的な視点と知見を提示する。その目的は、看護学におけ

る文化的能力を高めることにある。文化人類学の観点に立てば、文化的能力とは、民族や宗教や言語などの文化的多様性に対処しうる能力だけでなく、自らの認識や既存の概念を「相対化 (relativise)³⁾」しうる能力を含むものである。これは、自らの認識や価値観や前提を絶対的なものとみなさないということの意味する。したがって本稿では、私たちが自明とみなす「家族」概念の文化的、社会的構築性を明らかにする。文化人類学的視点の導入が、認識論的、方法論的転換に繋がることを示唆すると同時に、そのことが文化的能力に通じていることを示したい。

II. 「文化」の概念

「文化」という言葉は一般にも広く浸透しているが、「文化」の概念を学問的に定義することは非常に難しい。浜本満(1997:86-87)は、「文化」とは単なる個々人のもつものではなく一つの社会の人々に共有されている「なにか」であり、さらに生まれつき備わっているものではなく、学習によって後天的に身につけられた「なにか」でもあると述べている。そして次のように続ける⁴⁾。

「考え方や習慣の違いを『文化』の違いだと言って分かったつもりになってしまうのは、むしろ非・人類学的である。それは他者の理解どころか、その停止にすぎない……(中略)さまざまな習慣や行動の背景にあるものとしての文化の概念は、違いとその由来をより正確に捉えようとする探求の単なる出発点であり、どこに探求の照準を合わせるべきかの指針にすぎない。そしてそれが本当に有効な指針であったのかどうかも、もう一度検討しなおして見る必要があるのである」

この一見回りくどい表現は、「文化」を対象とする研究が陥りやすい危険性を示している。第一に「文化」の分析は、しばしば本質主義(essentialism)的になりやすい。本質主義とは、たとえば日本社会を一枚岩的にとらえ、そこに暮らす人々が共有する文化を実体とみなして、それを把握することでその人々の本質を客観的に表象することができるものとみなすものである⁵⁾。「家族」についていえば、特定の民族や社会が独自の親子や家族観を持ち、しかもそれが時代を経ても変わらないと考える見方である⁶⁾。文化人類学はこのような見方を否定する。この意味において文化人類学は社会構築主義(social constructionism)に基づいているといえる⁷⁾。第二に「文化」を対象とする研究は、「異文化」への注視に比べ、「自文化」は了解事項として等閑視する傾向がある。他者の理解は、分析者側の概念体系や価値基準の相対化なしにはありえない。文化人類学は、「他者」と

「自己」を往復することで双方を相対化する。

この他者と自己の世界を往復しながら双方を相対化し、人間と社会を動的かつ複眼的に捉える能力が文化的能力といえる。文化的能力はこれまで不問にされていた理論や方法をも問題化する。「家族」に関する研究も既存の概念の再検討から出発する。

III. 社会的構築物としての「家族」

「家族」は文化人類学の中でも大きなテーマである。ただし人類学が扱う非西欧社会では「両親とその子供たちからなる家族」を析出することが困難なため、親子関係などは「親族(kin, kinship)」という分野で研究されてきた。この親族研究は1970年代に理論的、方法論的な転換を経験している⁸⁾。それまでの機能主義的理論と分析は、そうした認識自体が問題化されるようになった。簡単に要約しよう。

19世紀後半、ルイス・モルガン(Morgan 原著は1877、日本語訳は荒畑1971)は、「血族婚→半血族婚→対遇婚→家父長婚→一夫一婦婚」という婚姻の進化理論を打ち立てた⁹⁾。彼の理論は、マルクスやエンゲルスらの社会主義理論の確立に大きな影響を与えたが、今日では、西欧中心主義(euro-centrism)に基づく解釈であったことが明らかにされている¹⁰⁾。つまり、西欧社会の一夫一婦制を頂点とする図式に、無理やりに押し込めてしまったのである。モルガンの西欧中心主義は、ジョージ・マードック(Murdock 原著1949、日本語訳は内藤1978)の「核家族」理論へと続く。マードックは、どの社会でも「一人の父親と一人の母親とその子供たち」の家族が基本となり、性・生殖・教育・消費という四つの機能を果たしているという核家族普遍説を主張した。核家族は、複婚家族や拡大家族をも説明する家族の最小の概念として定義された¹¹⁾。この核家族普遍説も西欧中心主義の産物であることは、非西欧社会の事例が証明している。

民族誌(ethnography)¹²⁾から反証例をいくつか紹介しよう。インド南西部ケーララ州のナーヤルでは、

妻問婚のため、一見家族のように見える集団には父親は含まれない。その代わりに母親の兄弟が重要な役割を果たしている。つまり「一人の母親とその兄弟、母親の子供たち」が社会の基本単位となっている¹³⁾。またカナダ北西部のヘヤー・インディアンの間には、子供は血が繋がった親やその近親者が育てなければならないという社会規範はない。原ひろ子(2001)によれば、彼らは「人の気持ちはうつろいやすい」ということを当然のこととしている。だから同居の相手も性生活の相手も一定しない。そして「子供は育てられる人が楽しんで育てる」という考え方を共有している¹⁴⁾。当然ながら、「一人の父親と一人の母親とその子供たち」である必要性はない。またアフリカの諸社会では、「生物学的父(genitor)」と「社会的父(pater)」を区別する。婚資を払って女性を妻にした男性がその女性の生んだ子供の正式な父親(=社会的父)になれる。こうした社会では、「生みの父」と社会的法的父が一致するとは限らない¹⁵⁾。

さて親族研究は、1970年代以降、それまで親族として記述・分析されてきたものの意味内容自体を再検討するようになる¹⁶⁾。たとえばデヴィット・シュナイダー(Schneider)は、生殖という生物学的根拠に基づく親子・家族、親族概念は欧米文化に特殊なものであって必ずしも普遍的でないこと、したがって安易な通文化比較も意味がないと主張した¹⁷⁾。上杉富之(2002)によると、シュナイダーの発言は親族研究自体に一時的な衰退をもたらしたが、親族の文化的、社会的構築性を明らかにした点でその後の親族研究に新たな視点を与えた。またフェミニスト人類学者による親族研究は、親族の中に埋め込まれたジェンダー、婚姻形態の多様化、生殖医療技術などを取り込むことで、親族研究の「転換」に大いに貢献した¹⁸⁾。今日では、「家族」はある特定の社会的、文化的文脈で構築される社会制度の一つとみなされている。

みてきたように、「家族」の存在を自明とした上で、研究者が属する社会の前提でその構造や機能を論じる時代は終わった。今日の親族研究は、「親族」や

「家族」が意味するもの、その形成の過程、さらには「家族」という枠組み自体をも問題にしている。次項では、現在日本をはじめ先進諸国に流通している「家族」が形成された過程について論じる。

IV. 「近代家族」の構築

山田昌弘(1994:23)は、親子・夫婦関係、親族集団、または労働集団への関心はかなり普遍的に存在しているが、私たちが今日意味するような一つのまとまりとしての家族への関心は前近代社会では多くはみられないと指摘している¹⁹⁾。ジャック・ドンズロ(Donzelot 原著は1977, 日本語訳は宇波1991:5)は、家族についての近代的な感情は、アンシャン・レジーム²⁰⁾のブルジョワ階級および貴族階級から生じて、19世紀末のプロレタリアートを含むあらゆる社会階級に同心円状に広がっていったことを明らかにしている²¹⁾。人文社会科学においては、現在私たちが「家族」と感じているものの形成を、「近代家族(modern family)²²⁾」という用語で分析してきた。

「近代家族」の形成を概観しよう²³⁾。前近代は、女性も男性も屋外・屋内での労働に関っていた。もちろんそこに男性の仕事、女性の仕事といった区分がなかったわけではない。しかし、たとえば女性の仕事である水運びは重労働であったし、さらに炊事、洗濯、掃除などの家内労働(domestic work)の一部は、現在の水準とはかけ離れたものであった²⁴⁾。子供たちは、七歳位になるとすぐに大人たちと一緒にされ、仕事や遊びを共にした²⁵⁾。単純化すれば、前近代の「家族」の条件は、家名の存続や家産の維持、日常的な生活上の相互扶助ということができる²⁶⁾。

近代化によって市場と家族が分離する。家内労働は、家事労働(domestic labor)へと変質する。この家事労働は、近代家族形成の担い手であるブルジョワ階級においては、当初主婦ではなく家事使用人によって担われた。しかし第一次世界大戦後、家事使用人という職業自体が衰退の一途を辿り、かつての

「女主人」が家事労働を遂行する「主婦 (housewife)」へと変貌する。「<主婦>の誕生」によって、今度はそれにみあう高水準の家事労働が発明され、そのためにますます専業で家事労働にあたる専業主婦が不可欠になっていく²⁷⁾。上野千鶴子(1986:115)は、「恋愛結婚」という理念は、女性たちを「家」から解放することで家父長制を解体することに手をかけたが、他方で、「恋愛=結婚」という新たな制度を通じて、女性たちを今度は「近代核家族」のオりに囲い込んだと指摘している²⁸⁾。家事労働は単なる技術であることをやめ、愛のあらわれとして定義されるようになる²⁹⁾。子供に対する認識も大きく変化する。17世紀から「学校化」と呼ばれる子供の隔離状態が開始される。今日では一般的に子供を表象する「純粋無垢」といった子供に対する心性は、この頃から創り上げられていく³⁰⁾。そして18世紀、「母性愛」と呼ばれる母と子の絆が母乳保育の文脈において出現する。母親は自分の生んだ子供を自らの母乳で育てるべきだということが、「自然」や「摂理」といった概念と一緒に繰り返し主張された³¹⁾。「母性愛」を女性の本能、至上の愛とみなす「母性神話」が形成される。こうして「家族」の条件は、夫婦や親子間の愛情となった。

牟田和恵(1998:12)は、「近代の国家にとって、地縁や血縁の共同体の支えを持たない弱体な小家族は国民管理の上で好都合であり、愛情深く保護され教育される子ども、稼ぎ手である夫、母・妻として家族員の衛生と健康・教育に気を配る女性よりなる小家族は、人々が自発的に近代社会の規律を内面化し『国民』として自己形成していく上でははなはだ機能的な装置であった」と述べている³²⁾。今日一般的に考えられているような「家族」は、近代化の過程で形成されたものなのである。したがって、「家族」に関する研究や実践は、「家族」という概念自体崩壊しうることを念頭に置く必要がある。

V. 「家族」への視点

みてきたように、他者と自己を往復することで「家族」という概念は相対化され、「家族」をめぐる文化的、社会的文脈が明らかになる。それは「家族」に対する既存の視点の再考を促す。

たとえば「家族」に関する研究や実践の中には、「家族は多様である」と主張しながらも、「近代家族」を前提としているものがある。近代家族=核家族を「家族」の基本型とみなした場合は、母(あるいは父)と子供の事例は、「母子家庭」(あるいは父子家庭)、「片親家庭」で、本来あるべきものが「欠けている」状態とみなされる。したがって「欠けている」状態を何とか引き上げるような努力がなされることになる。しかし、ナーヤルの事例からは、現代日本社会が、男と女の正式な婚姻のみを制度化し優遇する一方で、他のありようを差別している状況もみえてくる。

「近代家族」は血縁主義に基づいている。これは親子関係を生物学的論理のみに還元しているからである。しかしアフリカ諸社会のように、生物学的父より社会的父を重視する地域もある。つまりマードックに繋がる西欧中心主義的な家族理論が、親子関係を生殖の関係に変えていったのである³³⁾。このように視点を広げた場合には、たとえば生殖医療技術による親子関係同定の議論は、議論の基盤自体が大きく転換する。そして生殖医療に親子関係を多様化ないし多元化する可能性さえも見えてくるのである³⁴⁾。

ヘヤー・インディアンの人々も生物学的親を特権化しない。彼らは「一人で生きていくこと」術を幼い頃から学ぶ。もちろん危機に陥ったり困ったりした時には他の人が助ける。第一に「ミウチ」、第二に「近いシンルイ」、第三に「遠いシンルイ」と「友人」、第四にその他の「他人」となる。しかしどんな時にも複数の特定の個人と特定の個人が永続的な集団を形成して、協力ないし共同の生活に入ることはない。彼らの間に成立する協力関係は、「行きずりの助け合い」が親しさの度合いによって多かったり少なかつ

たりするといったもので、生活の単位はあくまでも個人である³⁵⁾。原ひろ子(2001)は、ヘヤー・インディアン社会における個人を中心とした絆を『「ネットワーク」としての家族』と呼んでいる³⁶⁾。この『「ネットワーク」としての家族』という視点からみれば、血縁家族主義は、人々の関係性を非常に狭い枠の中に押し込めていることがわかる。

民族誌、いわゆる「異文化」の事例は、単に「家族」の多様性を示しているのではない。それらは、「家族」の概念自体を根底から問うものなのである。今日の行政は、「家族」を自明とした上で「愛の共同体」とみなして「情緒安定」機能を指定する。したがって成員が理想に近づくための施策がいろいろと講じられる。しかし「家族」の概念自体を相対化すれば、こうした機能主義的見方には、「家族成員」に抑圧を強いる、あるいは「家族」の問題をますます困り込むことに通じる可能性があることがわかる。個人を家族から解放するという発想は、実は弱者にとってこそ最も切実であるという指摘もある³⁷⁾。また、家族単位から個人単位への制度改革も主張されている³⁸⁾。

上野千鶴子(1996:19)は、「家族」が人々の行動と思考を呪縛した時代という意味で、20世紀を『「家族」の世紀』と呼んでいる³⁹⁾。21世紀の今日も多くの人々は「家族=近代家族」主義である。だからこそ「家族」に関する研究や実践には、人々から「家族」の呪縛を解くことが求められる。

VI. おわりに

家族看護という分野において「文化」の視点は、まず「家族」という概念そのものの文化的、社会的構築性を認識するところから出発する。現在看護学が依拠する理論や方法論も、その正当性を検討する必要がある。また機能主義的モデルや家族アセスメントといった方法論は、モデルの妥当性だけでなく、行為自体を再検討する必要があるだろう。その他より具体的な点については、千葉大学看護学部 COE プログラム内で調査研究の後に稿を改めて論じるつもり

である。

看護師は、文化人類学者同様、人々の生活の場に入っていく。そこには既存の理論に収まりきらない「現実」があるはずである。それをどう解釈し、その「現実」にどのようにかかわっていくか。この時文化的能力は、他者(対象者)と自己(看護学)双方の認識や視点を相対化する⁴⁰⁾。人々の苦悩に対峙する看護実践の困難さは想像に難くない。しかし、その困難さゆえに、看護学には人々の現実と理論を架橋する可能性がある。その可能性の実現のために文化人類学的視点を役立てたい。

注

- 1) 文化的感受性とも訳せる。
- 2) たとえば「単一民族国家」は本来幻想に過ぎないが、一般の中には日本=単一民族国家説がいまだに通用している。
- 3) 文化人類学の視点の一つに文化相対主義(cultural relativism)がある。これは、ある文化のことはその文化の脈絡で理解するという見方である。一方、自民族中心主義(ethnocentrism)は、自らの価値判断を絶対として、その前提で全ての事象を判断するものである。
- 4) 浜本 満「文化の概念」、山下晋司・船曳建夫編『文化人類学キーワード』86-87、有斐閣、東京、1997。
- 5) 小田 亮「本質主義と構築主義」、綾部恒雄編『文化人類学最新術語100』178-179、弘文堂、東京、2002。
- 6) 上杉富之「現代生殖医療と『多元的親子関係』—人類学のパースペクティブ」、上杉富之編『新生殖医療技術に関する社会・文化的対応の国際比較』133-144、平成12年度~14年度科学研究費補助金(課題番号12371007)研究成果報告書、東京、2003。
- 7) 本質主義と社会構築主義は、単純に排他的な概念ではない。詳細については上野千鶴子編『構築主義とは何か』勁草書房、東京、2001を参照されたい。
- 8) これは学問全体を揺さぶるモダンからポストモダンへの知の転換に伴うものである。それまで研究の分析基盤とされていた「大理論(ground theory)」や「大きな物語(meta story)」は、その正当性を問われ、知の体系は根幹から転換した。
- 9) モルガンによれば、「対偶婚」は一对の男女関係を基本にしながら、その関係が不安定で脆い状態にとどまるもの。モルガン、ルイス/荒畑寒村訳『古代社会』角川書店、東京、1971。
- 10) 上野千鶴子『「家族」の世紀』、井上 俊・上野千鶴子他編『<家族>の社会学』1-22、岩波書店、東京、1996。
- 11) マードック、ジョージ/内藤莞爾監訳『社会構造—核家族の社会人類学』新泉社、東京、1978。

- 12) 伝統的には、文化人類学者が現地調査 (fieldwork) によってある「民族」の人々の生活を記述したもの。今日ではその対象は「民族」に限らない。
- 13) 栗田博之「家族」、山下晋司・船曳建夫編『文化人類学キーワード』138—139、有斐閣、東京、1997。
- 14) 原ひろ子『家族論』放送大学教育振興会、東京、2001。
- 15) 出口 顯『誕生のジェネオロジー—人工生殖と自然らしさ』世界思想社、京都、1999。
- 16) 上杉富之「現代生殖医療と『多元的親子関係』—人類学のパースペクティブ」、上杉富之編『新生殖医療技術に関する社会・文化的対応の国際比較』133—144、平成12年度～14年度科学研究費補助金(課題番号12371007)研究成果報告書、東京、2003。
- 17) 上杉富之「新生殖技術時代の人類学」『民族学研究』66—4:389—413、2002。
- 18) 上杉富之「新生殖技術時代の人類学」『民族学研究』66—4:389—413、2002。
- 19) 山田昌弘『近代家族のゆくえ—家族と愛情のパラドックス』新曜社、東京、1994。
- 20) 1789年フランス革命前の絶対君主制およびこれに対応する封建的社会体制。
- 21) ドンズロ、ジャック/宇波彰訳『家族に介入する社会—近代家族と国家の管理装置』新曜社、東京、1991。
- 22) 落合恵美子は「近代家族」の特徴を以下のようにまとめている。(1) 家内領域と公共領域との分離、(2) 家族構成員相互の強い情緒的絆、(3) 子供中心主義、(4) 男は公共領域・女は家内領域という性別分業、(5) 家族の集団性の強化、(6) 社交の衰退とプライバシーの成立、(7) 非親族の排除、(8) 核家族(「近代家族をめぐる言説」、井上俊・上野千鶴子他編『<家族>の社会学』23—53、岩波書店、東京、1996)。
- 23) 本稿は「近代家族」という概念の提示を目的とするため、西欧の家族史の紹介にとどめる。
- 24) 宮坂靖子「家事労働」、金井淑子編『家族』70—75、新曜社、東京、1988。
- 25) アリエス、フィリップ/杉山光信他訳『<子供>の誕生—アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』みすず書房、東京、1980。
- 26) このことは前近代の家族における愛情の欠如を意味するものではない。しかし「愛情」は今日のように特権的な地位を占めていなかった。また愛情の表現も違っていた。
- 27) 宮坂靖子「家事労働」、金井淑子編『家族』70—75、新曜社、東京、1988。
- 28) 上野千鶴子『女という快樂』勁草書房、東京、1986。
- 29) 宮坂靖子「家事労働」、金井淑子編『家族』70—75、新曜社、東京、1988。
- 30) アリエス、フィリップ/杉山光信他訳『<子供>の誕生—アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』みすず書房、東京、1980。
- 31) 出口 顯『誕生のジェネオロジー—人工生殖と自然らしさ』世界思想社、京都、1999。
- 32) 牟田和恵「社会学」、一色清編『AERA Mook 家族学のみかた』39:10—13、1998。
- 33) 出口 顯『誕生のジェネオロジー—人工生殖と自然らしさ』世界思想社、京都、1999。
- 34) 上杉富之「現代生殖医療と『多元的親子関係』—人類学のパースペクティブ」、上杉富之編『新生殖医療技術に関する社会・文化的対応の国際比較』133—144、平成12年度～14年度科学研究費補助金(課題番号12371007)研究成果報告書、東京、2003。
- 35) 「ミウチ」は父、母、父母をともにするキョウダイ、ツレアイ(性生活の相手)とその間の子供をさす。「シンルイ」に当たる人の外延ははっきり決まらず、したがって「シンルイ」と「友人」の境界は明確ではない。詳細は、原ひろ子『ヘヤー・インディアンとその世界』平凡社、東京、1989を参照されたい。
- 36) 原ひろ子『家族論』放送大学教育振興会、東京、2001。
- 37) 落合恵美子『21世紀家族へ〔新版〕—家族の戦後体制の見かた・超えかた』有斐閣、東京、1997。
- 38) 伊田広行『性差別と資本制—シングル単位社会の提唱』啓文社、東京、1995年。
- 39) 上野千鶴子『「家族」の世紀』、井上俊・上野千鶴子他編『<家族>の社会学』1—22、岩波書店、東京、1996。
- 40) 記述の仕方も問題化されるべきである。詳細はクリフォード、マーカス&マーカス、ジョージ/春日直樹&足羽与志子他訳『文化を書く』紀伊國屋書店、東京、1996。

'Culture' and 'Family' : A Cultural-Anthropological Perspective

Hiroko Kawazoe,
Chiba University

Key words : family, cultural competence, family as a network, cultural anthropology

This paper attempts to contribute to the cultural competence of Nursing Science through the presentation of an anthropological perspective on 'culture' and 'family'.

Cultural analyses on 'family' can be divided into two schools of thought : essentialism and social constructionism. Essentialism premises the existence of 'family' as the inevitable consequence of human activity, and examine the varying familial morphologies in the world. Essentialism's focus, therefore, is necessarily on familial functions and structures. Social constructionism, on the other hand, looks to the socio-cultural underpinnings of the family, and makes a critical assessment of the applicability of the concept of 'family'. It argues that : 1) the most common concept and interpretation of 'family' is inherently Eurocentric, and 2) the prevailing view of 'family' in contemporary society is an artifact of modernization. In other words, the very concept of 'family' itself is a socio-cultural construct. Cultural competence can help us understand this.

The issue which we must consider here is the difficulty in understanding that stereotyped definitions of 'family' are actually socio-cultural constructs, when most people tend to regard these definitions as natural. It is therefore essential for Nursing Science to look at the concept of 'family' with a critical eye. This will doubtless be a great challenge because nurses must work in a society that regards 'family' as self-evident. In responding to this challenge, however, nursing theory will be better able to meet the needs of patients.
